

大学生と読書：読書に関する考え方

University Students and Reading: Attitudes Regarding Reading

吉田 昭子

Akiko Yoshida

要旨

大学生の読書離れが各種の調査で、くりかえし指摘されている。読書時間ゼロの大学生が半数を占め、読書習慣のないままに社会人になる学生が増え続けている。大学生は読書をどのように考えているのだろうか。大学生の「読書はしないといけないのか」という問題提起にこたえた8人の新聞記事の投書を素材に、今どきの大学生の読書に対する考え方を記述式による具体的な調査を行い、考察した。

その結果、大学生は次のように考えている。読書は自主的にするものであり、読むか読まないかはそれぞれの自由である。読書は自分の知らない別の世界へと導く入口である。紙媒体やデジタル媒体が持つ長所を生かして、自分にあった媒体をいかに選んで使いこなせるかが、今後への重要な鍵であるなど、大学生一人一人の読書環境が複雑で、多様化していることが判明した。半数の大学生が読書をしないう状況の下で、研究視点の転換が切実に求められている。読書とは何かについて、従来の読書の定義を見直し、大学生それぞれの立場から多面的なとらえ方を見出す必要がある。その過程こそ、大学生の読書離れ対策への効果的な新たな突破口を見出す道につながる。

●キーワード：読書 (reading) / 読書習慣 (reading habits) / 大学生 (university students)

I. はじめに

各種読書調査で日本人の読書離れが指摘されて久しい。2019年2月から3月に文化庁が全国の16歳以上の男女を対象に実施した「国語に関する世論調査」¹⁾ 平成30年度によると、「1か月に大体何冊くらい本を読むか」という質問に47.3%が「読まない」と回答し、1か月に「1冊以上読む」は52.6%（「1、2冊」37.6%、「3、4冊」8.6%、「5、6冊」3.2%、「7冊以上」3.2%）であった。

同調査の過去の結果と比較すると「読まない」という回答は、平成14年度には37.6%であったが、平成20年度に46.1%に増加し、平成25年度は47.5%に達している。「読まない」という割合は、この10年間は大きく変化していない。また、「読書量は以前に比べて減ったか、増えたか」という質問には、「読書量が減少した」は、平成20年度は64.6%、平成25年度は65.1%、平成30年度には67.3%を示している。読書量が減ったと感じている人の割合は増加傾向にある。

一方、「読書量を増やしたいか」という質問に対する回答では「そう思う」という回答は、平成25年度は36.8%、平成30年度は28.0%となっており、9%減少し

ている。16歳以上の日本人で読書量が減っていると感じている人は増えている。その一方、読書量を増やしたいと考えている人は減少傾向にあることを示している。

大学生の読書時間については、全国大学生生活協同組合連合会（以下大学生協連）が全国の国公立および私立大学の学部学生を対象として、2018年10月から11月に実施した「第54回学生生活実態調査」²⁾ の結果では、1日の読書時間の平均は5年ぶりに増加して30分間となった。読書時間60分間以上の人も前年と比較すると8.4%増加しているが、「読書時間ゼロ」と回答している割合が48%を占めている。

「読書時間ゼロ」という回答は、前年の2017年10月に実施された「第53回学生生活実態調査」³⁾ では53.1%に達していた。「読書時間ゼロ」という回答が半数を超えたのは「学生生活実態調査」で2004年以後初めてのことだった。「読書時間ゼロ」の回答は、2018年度は若干減少したが、読書習慣のないままに社会人になるという大学生が半数を占めるという状況が依然として続いている。

実際に大学生は読書についてどのように考えているの

だろうか。本稿では、文化学園大学現代文化学部で筆者が担当した授業で大学1年生の読書に対する考え方についての意見を調査し、その実態について考察する。

II. 大学入学以前の読書実態とその傾向

筆者が担当する授業の中で、大学1年生65人に対して、大学入学以降「読書をしているか」、「大学入学以降に読書状況に変化はあったか」と質問してみた。すると、多くの大学生が「読書はしていない」「読書時間や読書量が減った」と回答した。理由は大学入学後に生活環境が大幅に変化したことやアルバイトで時間がない、他にやりたいことがあるなどがあげられた。

大学生協連が2018年度に実施した「第54回学生生活実態調査」²⁾で、今回初めて大学入学以前までの大学生の読書傾向についての調査が行われた。小学校入学前は「全く読まなかった」が31.8%、「30分未満」が31.7%、小学校低学年から高学年までになると「全く読まなかった」と「30分未満」が減少し、読書時間の長い層が増加する。小学校高学年では「30分以上」は54.1%だが、高校生では33.0%までに減少し、「全く読まなかった」は31.0%、「30分未満」は29.6%になる。

また、小学校入学前から高校にかけて「全く読まなかった」人は、現在も「ゼロ」が多い。特に高校時代に「全く読まなかった」のうちで現在も「ゼロ」と回答しているのが、72.7%に達するという。

全国学校図書館協議会の読書調査においても、小学生では不読状況が改善されるが、中学生、高校生になるにつれて、不読率は高まりをみせるとされる⁴⁾。つまり、不読の傾向は大学入学以前から既に始まっており、大学入学以前との関連で捉える必要があることを示している。

III. 大学生からの問題提起「読書はしなければいけないのか」

大学生協連の「第53回学生生活実態調査」(2016年10月実施)の調査結果から、不読の大学生が半数を超えたことは、驚きをもって多くのマスコミに取り上げられた。『朝日新聞』2017年2月24日朝刊では「大学生の読書時間「0分」が5割に」⁵⁾と題した記事として掲載された。

ところが、この記事に、読者の21歳の大学生から「読書はしないといけないの?」(『朝日新聞』2017年3月8日朝刊)⁶⁾という疑問が投げかけられた。投書の概

略は「自分は高校生の時まで読書は全くしたことはないが、これまで全く困らなかった。読書を生きる上での糧と感じたことはない。読書は役には立つかも知れないが、読まなくても問題はない。読書よりアルバイトや大学の勉強の方が必要である。読書は趣味の範囲で、楽器やスポーツと同じである。読んでも読まなくても構わないのではないか。」という問題提起である。

この意見が掲載されると、新聞社に104通に及ぶ読者からの反響が寄せられた。このことは、読書離れ問題に関する話題が、幅広い年齢層にとっての関心の高い話題であることを示している。

この投書を受け、『朝日新聞』2017年4月5日⁷⁾と4月12日⁷⁾に104通の反響の中から8通を取り上げて、「どう思いますか」と題した記事が掲載された。そして、この記事には、教育研究者の太田堯の「読書は大事だが、まずは豊かな感性を磨くことが大切」と評論家の津野海太郎の「未来に進むには、先入観を崩し、本の持つ力の再発見をするべきではないか」というコメントが掲載された。さらに、読者の中から8人を選んで、その意見も紹介された。中学生(10歳代)からシニア(70歳)までの読者から寄せられた投書内容の概略は、第1表のとおりである。

第1表 新聞記事に取り上げられた投書に対する意見

No.	「見出し」(年齢職業等)	内容
①	「大人は読書を押し付けないで」(14歳 中学生)	勉強に役立つとは限らない読書を時間を削ってまでする必要はない。効率が悪い。大人は子どもに読書を押しつけるが、読書は趣味の範囲で楽しいと思う人だけがすればよい。
②	「人と出合いを求めるなら」(64歳 無職)	自分は大学受験勉強を終えてから読書を始めた。読書はたくさんの人との出合いである。現実に出会うよりもはるかに多くの人で出会うことができる機会である。
③	「本が嫌いなら無理する必要はない」(50歳 看護師)	本を開くと誰にも干渉されずに違う時代、国に行くことができ、別の人生を感じることができる。メリットのために本を読むのではない。本を嫌いな人は無理をする必要はないし、大人も読んでいない人は沢山いる。
④	「あなたのお便りこそ本の原点」(70歳 契約職員)	本は言葉で伝えたい内容を多くの人に伝えるツールであるだけではない。言葉の奥には書いた人の人生がとじられている。読書は大海原の無人島で瓶に入った便りをうけとるのと同じ。良い本と出会ってほしい。

⑤	「ネット上にも糧になる言葉ある」(26歳 会社員) 本好きだが、書籍を読めば必ず知恵や教養が身につくとはかぎらず、活字という枠にとじこもって見えなくなることもある。インターネット上にも書籍とは違う言葉の力がある。時代の流れをよく見据えてほしい。
⑥	「デジタル媒体だって本なのだ」(49歳 会社員) スマホやパソコンなども紙を使わないデジタルな本である。記録媒体が印刷物から電子ドキュメントに以降しつつある中で、紙の本に限らず自分が関心のある分野の知識を広げてほしい。
⑦	「紙の本 深く読むには最善」(53歳 大学図書館員) 本は読書のための最善の手段である。本だけではなく映画、テレビ、インターネットからも学問の成果や知識を得て物語や詩を楽しむことはできる。しかし、ネットから切り離されて環境から深く集中するには紙の本が最善であり、若い時に読書することが重要である。
⑧	「良書を探すのは難しいけれど」(41歳 会社員) 読書をしないといけない確固たる理由はない。娯楽は沢山ある。数多くの本が出版されており、飽和している。良書を見つけるのは難しいが、有益かどうかで判断せず、作者の考えにふれ、自ら考えることの醍醐味にふれてほしい。

これらの投書には、読書することの良さや読書習慣を持つことの大切さが指摘されている。テレビ、パソコン、スマホなどメディアが急速に進歩し普及している現在では、読書環境が変化している状況を踏まえて、読書についての考え方も再考する必要があるという指摘がみられる。

IV. 投書に対する大学1年生の意見

第Ⅲ章でとりあげた朝日新聞の記事に対して、筆者が担当している文化学園大学現代文化学部の1年生(65人)にたずねた。まず、「どう思いますか」と題した新聞記事の投書を読んで、共感するか、共感しないか、自分の意見を400字程度にまとめるという方法をとった。全面的に共感するか否かだけでなく、部分的には異論がある場合も含まれる。

(1) 新聞の投書に対する大学生の共感

その結果は第2表のとおりである。第1表の投書の番号と第2表の番号は対応しており、比率は調査対象の総数65人の各投書に対する意見の割合である。

第2表 新聞の投書に対する共感

No.	共感する(人)	比率(%)	共感しない(人)	比率(%)
①	34	52.3	11	16.9
②	13	20.0	8	12.3
③	17	26.2	0	0
④	1	1.5	1	1.5
⑤	8	12.3	2	3.1
⑥	12	18.5	1	1.5
⑦	5	7.7	2	3.1
⑧	2	3.1	0	0

共感する意見では、①「大人は読書を押し付けないで」が5割程度と最も多くの大学生が賛同を示している。次に③「本が嫌いなら無理する必要はない」が3割弱程度を占める。②「人との出会いを求めるなら」と⑥「デジタル媒体だって本なのだ」が2割程度である。

共感しない意見では①「大人は読書を押し付けないで」、②「人との出会いを求めるなら」が続く。この2つの意見については共感するという意見も多いが、共感しないという意見も多い。また、③「本が嫌いなら無理する必要はない」と⑥「デジタル媒体だって本なのだ」には共感する意見は多いが、共感しないという意見は少ない。

(2) 投書に対する意見

次に第2表の投書に関する意見の多かった①②③⑤⑥⑦について、具体的に大学生が共感するか否かに関する意見の内容を示し、その傾向について述べる。

1) ①「大人は読書を押し付けないで」への意見

<共感する学生>

- ・小中高まで読書の時間があり、苦手だった。読書は強制されてするものではない(4件)
- ・嫌いなものを押し付けると一層嫌いになるので、押し付けるべきではない。(2人)
- ・読書には主体性が必要であり、強制されてしたくない。(2人)
- ・勉強には役立つだろうが、趣味の範囲だと思うし、押し付けられると反発を感じる(2人)
- ・読書については人それぞれ考え方は違ってよいし、読書しなくても困らない(2人)
- ・文字を読むのは苦手だが、情報入手方法は読書の他に沢山あるので、強制されたくない。(1人)

- ・読書好きの両親から暇な時間は読書をするように言われたのが嫌だった。(1人)
- ・他にやりたいことが沢山あるので、時間を削ってまで読書はしたくない。(1人)
- ・読書は自分の将来に役立たない、他の役立つことをしたい。(1人)
- ・読書習慣はなかったが、国語の成績はよかった。(1人)
- ・読書は古くから行われてきた習慣にすぎないので、読書は大切という固定観念を変える必要がある。(1人)
- ・効率の良さや時間の価値が重要視される時代なので、読書はそれにあっていない。(1人)
- ・大人と子どもでは物的、時間的な価値観の違いがあるので押し付けないでほしい。(1人)

<共感しない学生>

- ・自分の考え方が確立していない子どもの時期に大人が読書を勧めるのは当然だ。(1人)
- ・自分の読書嫌いを大人のせいにするには違和感がある。(1人)
- ・強制されることに対する反発や試験に役立つかどうか重要なわけではない。(1人)
- ・強制はよくないが、朝読書の時間は意味がある。(1人)
- ・読書の時間の課題等で、無理に読ませることで読書が勉強と結びついてしまっている。読みたい人が読むような内容にすれば読む人が増えるのではないか。(1人)
- ・本を読むことで必要最低限度の読解力を身につけることができる。(1人)
- ・読書をするだけで、言葉使いやセンス、語彙力に違いが出て、人生が豊かになる。(2人)
- ・試験にすぐ役立つわけではないが、文字を通して理解することで、日常的な勉強にも役立ち、メリットはある。(1人)
- ・新しいことの発見は読書から始まる。(1人)
- ・本は面白いし、読み終わると達成感がある。(1人)

<考察>

多くの大学生が子どもの時に大人から読書することを勧められたことを押し付けられたと受けとめ、強制的な読書に対する反発を示している。読書も趣味と同じで、スポーツをするのが苦手な人に無理やりスポーツを押し付けるべきではない。読書は自主的にすべきであり、楽しさはそこから生まれるとしている。

共感しないという意見では、大人が子どもに読書を勧めることは当然である。読書の時間を設定し、読書を推進することを肯定的に受け止める意見がみられる。

共感する意見には、読書をしなくても困らない。自分の将来にとって役に立たないことをするのは、時間の無駄である。読書の他にもやりたいことが沢山あるので、時間がもったいないなど、即効性を求め、実用的な側面に注目した意見が多くみられる。

共感しないという意見では、読書をするのは、語彙力や読解力の向上に役立った。読書をするだけで言葉のセンスなどに影響があるので、読書はすべきだ。読書することで新たな発見があり、読み終えることで達成感を得られるという指摘がみられる。それぞれ読書することの目的や期待するものや価値観が異なる。実用的な目的が達成されない限りは時間の無駄と考える場合と自分なりの達成感や満足感を得ている場合に分かれる。

2) ②「人との出会いを求めるなら」への意見

<共感する学生>

- ・読書は現実の自分とは異なる人生を歩むことができる道具であり、読書の魅力に気づくことで人生を豊かにすることができる。(2人)
- ・人との出会いを求める時、読書は大切な機会である。(1人)
- ・小さい頃に伝記を読んで多くの人々との出会いがあった。(1人)
- ・読書を通じた作者との出会いにより、自分とは違った様々な人の意見を知ることができる。(2人)

<共感しない学生>

- ・本の中での出会いよりも現実の出会いの方が重要だと思う。(5人)
- ・人との出会いを求めるのなら、読書以外にも方法がある。(1人)
- ・現在のことが重要で、歴史的な古いことは必要がない。(1人)
- ・読書以外に映画や映像でも違う世界を体験することはできる。(1人)

<考察>

共感する意見では、読書の魅力は自分の世界とは違った別の世界を訪れ、新たな出会いが可能になることである。幼い頃に伝記を読んで様々な人生を知ることができ、視野が広がった。自分とは異なる時代や地域の人々との交流が可能になり、他の人の考え方を学ぶ機会になる。

しかし、その一方で出会いを大切と考えるならば、日常の現実の世界の人々との出会いや交流こそが大切で、

それを優先すべきだ。常に現在の現実の世界の活動を重視するという傾向がみられる。

3) ③「本が嫌いなら無理する必要はない」への意見
＜共感する学生＞

- ・本は無理に読むのではなく、読みたい時に読むことで別の世界を知り、楽しむことができる。(1人)
- ・読書をするかしないかは自由だが、読むと読まないでは文章を読むスピードなど、いろいろな点で差がある。(1人)
- ・無理して読む必要はないが、読書をすることで想像力を養うことができる。(1人)
- ・詩を読むことで文字や読書への拒否感を克服し、読書を楽しむことができるようになった。(1人)

＜共感しない学生＞ (0人)

＜考察＞

強制されることに対する反発は、①の意見に対する意見にもみられたが、読書することで想像力や文字を読むスピードに影響し、効果がある。文章の長さや文字の量の多寡が読書に対する苦手意識と結びついており、長文を読むことは苦手でも、詩などの短い文章を読むことで、コンプレックスを克服したという体験もみられる。

4) ⑤「ネット上にも糧になる言葉ある」への意見

＜共感する学生＞

- ・ネットは、今や欠かせないメディアである。(1件)
- ・ネットも正しく使えば、必要な知識が身につく。(1件)
- ・インターネットの方が文字数も少なく読むのが簡単で、短い方が心に残りやすい。(1件)
- ・SNSが発達した今では、情報を得るにはSNSは重要だ。(1件)
- ・インターネットにも本以上の学びがあり、読者どうしのより広いつながりを得ることができる。(1件)
- ・活字以外にも響く言葉は沢山ある。自分の視野以外にも情報は入ってくる。(1人)
- ・どんな媒体が自分にあうのかを見極めることが大切である。(1人)

＜共感しない学生＞

- ・インターネット上には書き手がその時の気分で書いているものが多い。読み手も自分の意見に似たものを選んで読みがちになる。(1人)

＜考察＞

ネットは今や幅広い有益な情報を得るためには欠かす

ことができない有効な手段であり、ツールとして肯定的に迎えられている。文字を読むのが苦手なため、ネット上の文章の方が文字の分量が少なく、印象に残りやすくなじみがある。ネットには本とは異なる新たな活用の可能性がある。だが、その反面、情報の不確実性や情報提供、利用における情報の編集や表現での偏りが生じやすいという問題があることも忘れてはならないという指摘もみられる。

5) ⑥「デジタル媒体だって本なのだ」への意見

＜共感する学生＞

- ・本以外に、テレビ、新聞、インターネットなどから様々な重要な情報をえることができる。(1件)
- ・デジタルと本を比較してみても、得られる情報や知識は変わらない。(1件)
- ・デジタル媒体は持ち歩きも便利な特徴があり、それぞれが自分にあった方法で読書をする方がよい。(1件)
- ・電子書籍が増加することで、ふだん読書をしない人も空き時間を使ってもっと読むようになる。(1人)
- ・デジタルの方が便利なこともあるので、それぞれの利点を生かすべきである。(1人)

＜共感しない学生＞

- ・自分はデジタルよりも紙媒体の方が好きであり、紙媒体の良さにはおいや感触などである。(1人)

＜考察＞

様々なデジタル情報の利用が可能になり、紙媒体とデジタルそれぞれの特性に基づく使い分けが求められる。デジタル情報をいかに使いこなすか。今後も持ち運びの簡易さや加工の容易さを生かすことができれば、すき間時間を利用して、自分にあった新たな読書を展開できるという可能性があるのではないかという指摘もみられる。

6) ⑦「紙の本 深く読むには最善」への意見

＜共感する学生＞

- ・紙の本は変化するかもしれないが、読書の醍醐味は変わらない。(1人)
- ・デジタルだけではなく、好きなものについては、アナログで読みたい。(1人)
- ・本が一体何のために作られているのか、もう一度考え直すべきである。(1人)

＜共感しない学生＞

- ・インターネットから切り離されることによる良さがわ

からない。(1人)

- ・時代が変われば、その時代にあった方法があるので、紙の本が最善とは思わない。(1人)

<考察>

紙媒体である本の特徴とは何か。アナログに対する愛着やデジタルに対する期待がみられる。本の良さを見直し、読書の意味をもう一度考え直してみる必要があるのではないかといった転換期ならではの疑問が提起されている。

V. おわりに

今回調査の対象とした大学1年生の意見をみると、大学生のそれぞれが自分たちなりに気づいていることがわかる。実際に共感した人が多い投書の①と③と②の意見、⑤と⑥と⑦の意見には関連性が見て取れる。

ほぼ半数が共感を示した①「大人は読書を押し付けないで」には、読書は自主的にするものであり、大人から強制されたくないという気持ちが強く反映しているものと考えられる。これを受けて、③「本が嫌いなら無理する必要はない」という意見にも3割弱の支持が寄せられている。読むか読まないかはそれぞれの自由であるという考え方に共感している。しかし、そこには読書は自分の知らない別の世界へと導いてくれる入口であるという考え方もみられる。それは②の「人と出会いを求めるなら」にみられるように、読書によって多くの人との出会いが可能になるという考え方にも通じている。

⑤「ネットにも糧になる言葉ある」、⑥「デジタル媒体だって本なのだ」はともに、デジタル媒体の進歩、その特性が読書にもたらす効果を認めて期待する考え方がみられる。今後は紙媒体、デジタル媒体が持つ長所を生かして、自分にあった媒体をいかに選んで使いこなすことができるか、それが鍵になることを示している。

今、新しい学習指導要領による高等学校「国語」の科目再編の話題が取り上げられ、国語についての論議が行われている。「日本語を外側から見つめて」⁸⁾の中で、金田一秀穂は、次のように述べている。AIの技術的な急速な進歩にともなって、時代によって求められる教養が変化する。AIが進化すると、知識が多いことは意味をなさない。AIにはできないこと、それは人間一人一

人が自分の頭で考えることが求められる。金田一は、これからの時代は、自分で考えて自分で判断できるようになることが重要であると指摘している。

インターネットやデジタル環境が大幅に変化し、大学生をめぐる読書環境が大きく変容している。「読書習慣のない大学生の特性と傾向」⁹⁾については、半数の大学生が読書をしていないという状況下で、大学生に読書習慣があるという前提での議論はできないという指摘もみられる。大学生にとって学業(勉強)はメインカルチャーではあるが、読書習慣をメインカルチャーとしてとらえるには、既に限界がある。研究視点の転換が必要であるという問題提起もみえてきている。

読書とは何かについて、従来の読書の定義を見直し、大学生それぞれの立場から多面的なとらえ方を見出す必要がある。その過程こそ、大学生の読書離れ対策への効果的な新たな突破口を見出す道につながると考えられる。

注・参考文献

- 1) 文化庁。“国語に関する世論調査”平成30年度”
http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1422163.html (参照 2019-11-10)
- 2) 全国大学生生活協同組合連合会。第54回大学生生活実態調査の概要報告。
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (参照 2019-11-10)
- 3) 全国大学生生活協同組合連合会。第53回大学生生活実態調査の概要報告。
<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (参照 2019-11-10)
- 4) 全国学校図書館協議会。第65回学校読書調査。
<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html> (参照 2019-11-10)
- 5) “大学生の読書時間「0分」が5割に”。朝日新聞。2017年2月24日朝刊。3頁。
- 6) “(声) 読書はしないといけないの? ”。朝日新聞。2017年3月8日朝刊14頁。
- 7) “(声) どう思いますか: 読書はしないといけないの? ”。朝日新聞。2017年4月5日朝刊14頁, 4月12日朝刊18頁。
- 8) 金田一秀穂。日本語を外側から見つめて。中央公論。2019, vol.133, no.12, p.66-69.
- 9) 浜島幸司。読書習慣のない大学生の特性と傾向。武蔵野大学紀要。2019, vol.9, p.77-88.
<http://id.nii.ac.jp/1419/00000995/> (参照 2019-11-10)